2012年10月1日発行

ニュースレター News Letter

No.31

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

所長挨拶
2012年度の研究所

所長　帆苅　猛

２０１２年度の研究所の活動が順調に進み、まもなく秋学期が始まろうとしている。今年度は、前年度比10％減という厳しい予算のもとでの運営を余儀なくされている。大学全体が厳しい状況の下、やむを得ないところではある。ただ、研究所は研究活動が命である。今年度も、各研究グループ、研究プロジェクトの研究活動にはできるだけ支障をきたさないように配慮をし、他の削減できるところは大幅に削減するかたちで出発した。

本研究所は、学部を横断して全学部からメンバーが集まり、なおかつ、本学の建学の精神であるキリスト教に関する唯一の研究所である。本学の存立の根幹にかかわる教育・研究に携わる重要な研究所であると認識している。そうした位置づけを生かすためには、今後はとくに、在学生・卒業生への教育の面での貢献が期待されているものと思われる。

そのためには、もちろん、スタッフおよび予算の充実が必要なことはいうまでもないが、しかしいずれにしても、本研究所のこれからの構想の中に含めて論議し、実行に向けて活動していく必要があろう。

私見ではあるが、在学生や卒業生に向けた、生涯学習センターの講座、あるいは、学部を横断した研究所附置の講座として「奉仕・ボランティア論」などの講義が考えられないだろうか、と思っている。このような講義であれば、これまでの研究所の研究や活動を生かしつつ、本学の教育に寄与できるのではないかと考えている。

特別講演会報告（抄録）

２０１２年３月３日に元本学宗教主任の大島良雄先生をお招きして、特別講演会を開催しました。当日は学内外より約６０名の出席者が集まり、盛況かつ和やかに講演・懇談が行われました。

「アメリカン・バプテストの日本宣教」

大島 良雄

アメリカン・バプテストの外国伝道

アメリカのプロテスタント諸教会の外国伝道は１８１２年アメリカン・ボード（組合教会）がジャドソン夫妻などを印度に派遣した時に始まった。ジャドソンは印度で英国バプテストの宣教師ケアリーと会うことを考え、船中で聖書を研究し「信仰者の浸礼」が聖書的なバプテスマであると確信した。別の船で印度に到着した独身者のライスも同様の結論に達した。組合教会を離れバプテストに転じたジャドソンは活動の支援を求める手紙を故国のバプテスト達に送り、ライスは帰国し、後援団体の結成に努めた。ライスの努力と創意とによって１８１４年5月フィラデルフィア・バプテスト教会に３３名の代議員が集って「外国伝道のための合衆国におけるバプテストの宣教総会」を結成した。３年毎に総会を開く事を決しTriennial Convention（ＴＣ）と呼ばれた。これがアメリカにおけるバプテストの最初の全国的な組織で、外国伝道と言う目的の為に共同の事業を行う事になった。個別教会主義に立つバプテストはこの組織を個別教会の上に立つもの、統合する組織とせず、諸教会の有志が society（協会）を形成して共同の事業を行う組織とした。またその活動を教派として支援する為に出版協会、内国宣教協会、内外聖書協会、神学校などの組織を充実し外国伝道の発展を図った。

日本宣教の決定

安政条約の発効の翌年１８６０年に来朝したゴーブルは１８４３年人権と奴隷制度に反対を唱えボストンでＦＭＳ（バプテスト自由伝道協会）を興してＴＣを離脱した群れに属した。彼は来日後故国からの支援が途絶え困苦の裡に日本最初の聖書『摩太福音書』を翻訳出版した。その年１８７１年末に帰国したが、条約改正を意図する岩倉使節団と偶々同船し、禁教解除の日の近いことを察し、ＡＢＭＵ（１８４５年南部バプテストが離脱後、ＴＣは改組しアメリカン・バプテスト宣教師同盟[American Baptist Missionary Union]と改名した）に日本伝道の急務を訴えた。ＡＢＭＵは１８７２年の総会でゴーブルと先にビルマの宣教師として大きな功績を残したブラウンとをＡＢＭＵの宣教師として、ＦＭＳの日本宣教を継承する形で派遣する事を決した。

日本宣教の開始と横浜宣教拠点

１８７３年2月7日にブラウン夫妻、ゴーブル夫妻が横浜に到着し日本宣教を開始した。同月２４日に切支丹禁制の高札が撤去され基督教宣教が黙認された。彼らは3月2日に山手２０３番地に横浜第一浸礼教会を設立した。（後に山手７５番に移転）

ブラウンは教会の牧師を勤めながら基督教文書の出版、新約聖書の翻訳に従事し１８７９年8月に完了出版した。１８７５年には婦人外国伝道協会からブラウン夫妻の活動を助ける為にミス・サンズが派遣された。彼女は婦女子の教育、近隣町村の伝道に従事し大きな成果をあげ、多くの人材を育成した。

１８７９年１２月にベンネット夫妻が来日しブラウンの活動を助けると同時に伝道者養成の急務を感じ、１８８４年１０月にバプテスト神学校を設立した（関東学院の源流である）。なお夏季休暇中は長野、茨城、栃木、山口の諸県に伝道した。

東京拠点

アーサーは１８７３年１０月に来日し、横浜で日本語を学習しながら英語を理解する青年達に伝道していたが、７４年６月元駐米公使森有礼の招きで上京、一時期その邸内に学校を開いたが、基督教教育実施の許可が得られず、学校は７５年に来日したミス・キダーに委ねた（駿河台英和女学校）。彼は７６年に東京第一浸礼教会を設立したが、翌年病のため帰国、後に病没した。

バプテストの東京に於ける唯一人の宣教師となったミス・キダーの学校、教会の働きを援ける為に７８年１２月リースが来任した。

東北伝道

ミス・キダーの活動を助けていた大学予備門のお雇い教師ポートは７９年末に按手礼を受け、８０年１月盛岡でギリシャ正教会からの改宗者６名をもって盛岡浸礼教会を設立した。それは７９年春、所用で盛岡から来浜した一人の正教会の信徒がＮ・ブラウン訳の分冊聖書を入手して帰郷、同志と学んで改宗を決意、執拗に宣教師の派遣を要請したのに応えたものであった。それを契機として青森、岩手、秋田、宮城の諸県にまたがる東北伝道が展開され、盛岡、仙台、花巻、柳津、酒田、八戸などに教会が設立された（パウロのマケドニアからの招きを想起させる）。

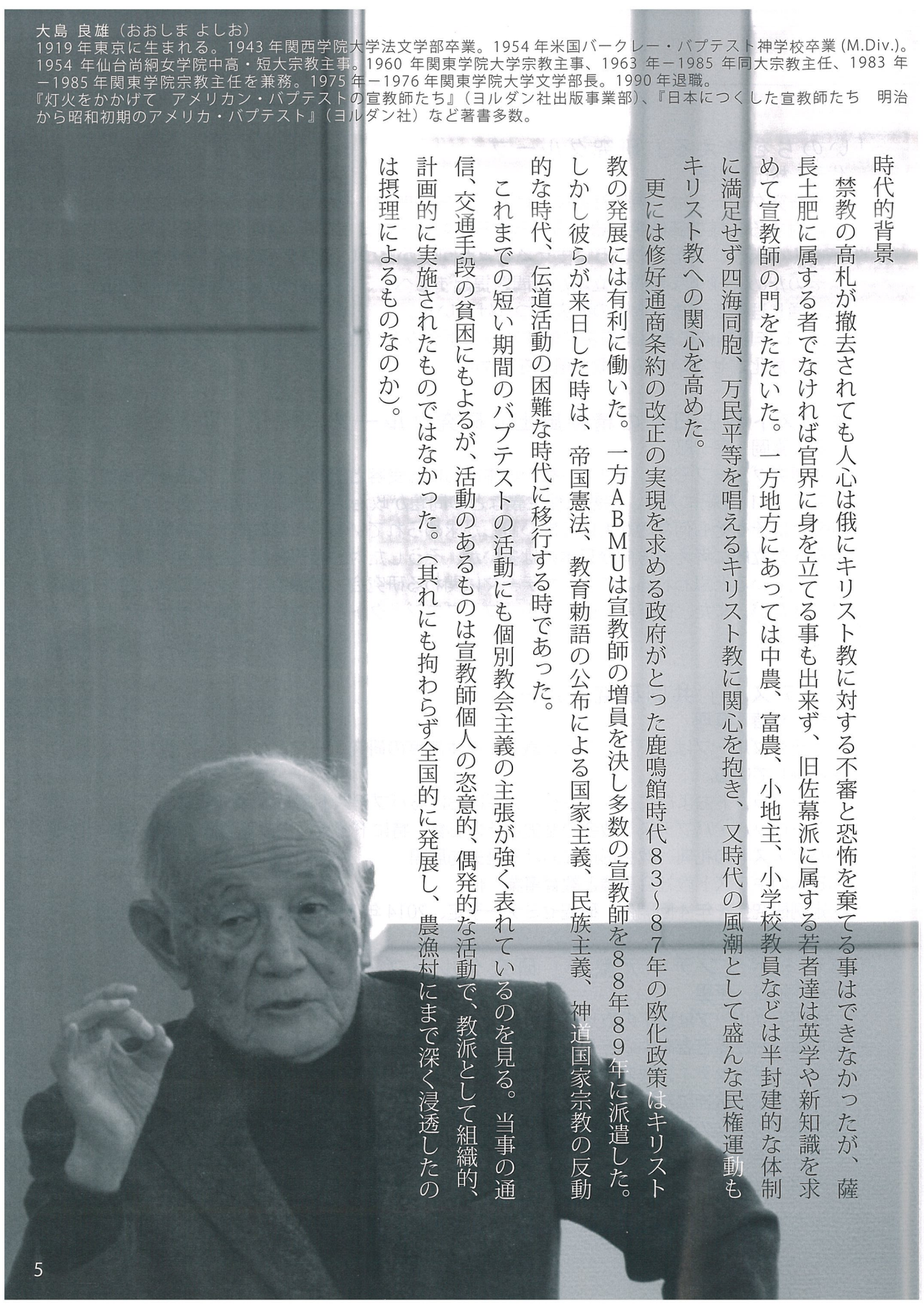
神戸伝道

先に述べたリースは東京での働きに満足できず、求めのある事を知り徳島に伝道、８１年に徳島教会を設立した。彼は西日本伝道の拠点を神戸に求め８２年１月に神戸宣教拠点を開設した。やがてそこを基点としてアップルトンの山口県伝道（長府拠点）、タムソン、ワインドらの大阪、タムソンの沖縄伝道、ビッケルの瀬戸内海福音丸伝道、タフトの京都伝道が始まることになる。

北海道伝道

８６年９月にカーペンター夫妻が自給宣教師として来日し根室で開拓伝道を開始した。９０年パーシューレーが来援した時からＡＢＭＵの宣教拠点となった。

大島 良雄（おおしま よしお）
1919 年東京に生まれる。1943 年関西学院大学法文学部卒業。1954 年米国バークレー・バプテスト神学校卒業 (M.Div.)。1954 年仙台尚絅女学院中高・短大宗教主事。1960 年関東学院大学宗教主事、1963 年－1985 年同大宗教主任、1983 年－1985 年関東学院宗教主任を兼務。1975 年－1976 年関東学院大学文学部長。1990 年退職。
『灯火をかかげて　アメリカン・バプテストの宣教師たち』（ヨルダン社出版事業部）、『日本につくした宣教師たち　明治から昭和初期のアメリカ・バプテスト』（ヨルダン社）など著書多数。



時代的背景

禁教の高札が撤去されても人心は俄にキリスト教に対する不審と恐怖を棄てる事はできなかったが、薩長土肥に属する者でなければ官界に身を立てる事も出来ず、旧佐幕派に属する若者達は英学や新知識を求めて宣教師の門をたたいた。一方地方にあっては中農、富農、小地主、小学校教員などは半封建的な体制に満足せず四海同胞、万民平等を唱えるキリスト教に関心を抱き、又時代の風潮として盛んな民権運動もキリスト教への関心を高めた。

更には修好通商条約の改正の実現を求める政府がとった鹿鳴館時代８３～８７年の欧化政策はキリスト教の発展には有利に働いた。一方ＡＢＭＵは宣教師の増員を決し多数の宣教師を８８年８９年に派遣した。しかし彼らが来日した時は、帝国憲法、教育勅語の公布による国家主義、民族主義、神道国家宗教の反動的な時代、伝道活動の困難な時代に移行する時であった。

これまでの短い期間のバプテストの活動にも個別教会主義の主張が強く表れているのを見る。当事の通信、交通手段の貧困にもよるが、活動のあるものは宣教師個人の恣意的、偶発的な活動で、教派として組織的、計画的に実施されたものではなかった。（其れにも拘わらず全国的に発展し、農漁村にまで深く浸透したのは摂理によるものなのか）。

2012年度各プロジェクト・グループ活動計画

研究プロジェクト

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト

代表：森島　牧人

本プロジェクトでは、東漸した古代キリスト教の史実を唐代における景教に焦点を当て、現存する史料や遺跡を中華人民共和国陝西省の省郡西安市にて研究調査することによって明らかにする。2011 年度に行なった雲南省での調査結果を踏まえ、複数の大学研究機関（中国昆明理工大学・タイ国立タマサート大学等）と研究者による専門調査チームを構成し、調査にあたる。なお、本調査に関しての報告は当研究所所報にて学術論文として発表し、内外の研究者を招いて行う研究会においても発表する。

「坂田祐」研究プロジェクト

代表：帆苅　猛

本研究プロジェクトは、以下の取り組みを計画している。

①坂田日記研究
②昨年度開催した大島良雄先生の講演「アメリカン・バプテストの日本伝道」の概要をまとめて、所報に掲載する。
③坂田祐関係の資料の調査と収集
④柳生直行先生の聖書翻訳についての研究
⑤『坂田祐と関東学院の教育』を、学院チャプレン会、学院燦葉会、合同同窓会、大学出版会等との協力の下、出版する。
⑥関東学院史、坂田祐についての研究

研究グループ

「依存症と環境神学」研究グループ

代表：安田　八十五

本研究グループの目的は、「依存症」および「依存症社会」の構造と特質をキリスト教の視点から分析し、解析のための方法と手段を探ることである。主な研究課題として、以下のテーマを計画している。

①依存症に関する総合的調査研究
②依存症社会に関する総合的調査研究
③依存症と依存症社会に関するキリスト教との関係の基礎的調査研究
④依存症からの回復のための 12 ステップ方式自助グループの実践と実践的研究
⑤大麻・ドラッグ類・不登校・引きこもりの最近の大学生等に起こっている学生依存症問題に関する研究
⑥災害による依存症と依存症社会の深刻化の分析と環境神学の構築
⑦公開シンポジウムの開催
⑧出版計画の具体的作業

「いのちを考える」研究グループ

代表：松田　和憲

本研究グループは「現代社会におけるいのちの問題」を本年度の研究テーマとする。いのちに対する多様な価値観が認められる今日、社会・コミュニティがいのちをどのように支えていくべきか、またどのように支えることが可能かについて、十分な検討と考察を行う。

そのため、様々な専門的立場から問題提起するべく、おおよそ月毎の研究会を開催し、議論を通じ理解を深め、今後の研究につなげていく。

2011 年度開催の東日本震災に関するシンポジウム（セミナー）を 2012 年度も継続させ、記憶を風化させないための取り組みを進める。

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ

代表：富岡　幸一郎

本研究グループでは、キリスト教の日本における受容とその変遷について様々な角度から検証する。21 世紀に入り、宗教原理主義などの問題が政治的・文化的課題となっているが、一神教とはそもそも何なのかという問い直しが求められている。多神教的・汎神論的なものと一神教を対立的に考える志向が日本には多いが、そうした対立図式を超えた視点の形成こそが求められていると思われる。こうしたテーマに関わる研究会・講演会・シンポジウム等を企画していきたい。また、研究所の他のグループ、プロジェクトと連携した活動を進めることを予定している。

「バプテスト」共同研究グループ

代表：村椿　真理

本研究グループは「バプテストと教育」を本年度の研究テーマとし、以下の課題・取り組みを計画している。

①イングランドおよびニューイングランドにおけるバプテスト高等教育の研究
②ヨーロッパ・バプテスト教会の歴史とその影響　特にドイツにおける展開　教育と教会形成
③バプテストの礼典　教会形成における歴史的展開
④日本のキリスト教社会事業と教育事業　他
⑤定例研究会を年 4 回開催、研究セミナー予定、2014 年 3 月に研究叢書第 3 号刊行予定

「奉仕・ボランティア教育」研究グループ

代表：細谷　早里

本研究グループは以下の取り組みを計画している。

①日本における若者を中心とした地域奉仕ボランティア意識調査
②奉仕・ボランティア教育の理念と米国における事例研究
③キリスト教精神に基づく愛の業とその理念の研究
④関東学院大学の建学の精神の研究（キリスト教的理念、関東学院大学の歴史とその前史の研究、関東学院の指導者たちの教育思想の研究、関東学院大学・学院内校に見られる奉仕活動の紹介と校訓アンケートの分析を含む。）

The space of the Member

「文化と信仰のはざまで」

所員 法学部　大鐘敦子

このたびキリスト教と文化研究所の所員となりました。今後はバプテストおよびカトリックなど広い意味でのキリスト教の枠組みや聖書について知識を深め、本学の理念をより深く理解できるように努めたいと存じます。

専門は１９世紀フランス文学で、レアリスムの父、あるいは現代では近代小説を作ったとして草稿研究の盛んなギュスターヴ・フローベールという作家を研究しております。またその最後の作品では、フランス文学史上初めて「サロメのダンス」が描かれていたため、世界中のサロメの文芸作品を研究しています。「ファム・ファタル神話」という枠で見ますと、旧約聖書のユーディットなど、ファム・ファタルの起源は聖書に多く見ることができ、その最たるものはイヴでした。

一方、最近は１９世紀フランス社会における国家と宗教の問題も重要だとして、宗教学やライシテ問題に注目しています。また理解のために、フランス滞在中はなるべくミサに参列しています。

長い歴史の中ではぐくまれた深い信仰と世界に発展した文化の狭間のなかで、キリスト教、そして本学の理念を学んでまいりたく存じます。

「ルーツ：関東学院」

所員 工学部　渡部 洋

私は、中学校から大学院博士前期課程までの12年間、関東学院でキリスト教に触れました。博士後期課程以降、お世話になった他大学で、母校がどのような教育理念をもつ大学だったかを語らう場面がありました。自らの不勉強により、関東学院大学がキリスト教をどのように教育に位置づけているのか、周囲に十分な説明をできず、恥ずかしい思いをしたことがあります。

また、大学1年のときの兵庫県南部地震の後、神戸での生活支援ボランティアなどを経て、次第に現在の研究テーマである建築物の構造や防災への関心を強めてきました。先日、数名の学生が、あるキリスト教のグループによる東北地方太平洋沖地震により津波につかった住宅のハウスクリーニングに加えていただいたことがありました。朝のお祈りからはじまる活動に戸惑いつつも、貴重な経験を伝えてくれました。

所員として、

・関東学院がどのように教育にキリスト教を位置づけているのかを学びなおすこと。

・ボランティアに代表される共同作業でお互いを理解すること。

これら2点に関心を持ち、所員としての貴重な時間を過ごしたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所

〒236-8501
横浜市金沢区六浦東１－５０－１
電話：０４５－７８６－７８７３(研究所直通 月～金曜９：30～17：30)
FAX：０４５－７８６－７８０６(研究所直通24時間受け付)

発行者：帆苅　猛
Director: Takeshi Hokari